

報



會

會 岳 山 本 日

85

月 四・三 年 四 十 和 昭

吾が山岳畫道

中村 清太郎

こゝで別にやかましい畫論を述べ
るつもりは無い。又出来もしまい。
唯山へ入つて畫を描く人間が、偶々
畫室で風の音を聴きながら、不圖眼
を内へ向けて何か胸の底にモヤモヤ
してゐるものを少し浚ひ出して見よ
うと試みたまでだ。(但し處を得ない
かを愛へる)。

山へ入る、山へ入つて畫を描く、
全く自然とさうなつたやうなもので、
理屈などから始まつたわけでは
ない。だが考へると自分乍ら不思議
な思ひもするし、又相應な曲折もあ
り、面白いと思ふ節もあるやうで、
少しホジクつて見たい氣もする。併
し畢竟要らざる業だ。そんな事をし
ないでも山の繪を描くに差支へは無
い。所が少し視角を變へると、必ら
ずしも要らざる業で無いかも知れな
い。又何かどうさう命するやうでもあ
る。そこで紙を汚す。

畫は好きだつた。併し自然はもつ
と好きだつた。イヤ好きどころでは
ない。自然に飢えて縋りつき度い心
持だつた。生ひ立つた周圍が都會の
眞中だけに、自然といふものに極度
に缺乏してゐたのだ。そんな事を書
き出すとキリが無いから之は別の時

に譲らう。兎に角尋常ではない渴き
方で自然に縋つて行くと、おのづか
ら山へ入つて行くのだつた。も少し
丁寧にいへば、純粹な高大な自然へ
自然へと、先達を頼りに辿り入つた
わけだらう。

自然の味を覚え、山の味を解した。
その滋味を食つて、自分といふもの
は身心共に救かつたのだと信じてゐ
る。そして其處で何かイヂくつてゐ
るうちに、身に合つた仕事は理屈や
文字ではなく矢張り繪だつた。尤も
之にはいはゞ編てた人もある。編て
られるのは嫌ではなかつた。叱つた
人もある。叱られるのは好きでなか
つたが、叱られやうでは結果は同じ
だつた。いや以上かも知れない。何
れも恩人である。兩方を兼ねたのは
大恩人である。併し最大の恩師は自
然であつた。神といつても宜しから
う。外の恩師は皆その眷屬である。
少し感慨に走りすぎた。中々さう
ストラとは行かなかつた。何しろ
鈍才だ。山の繪に打ち込める迄には
さんざん迷つた。苦しんだ。殆ど絶
望に陥つた。自分の心が勝手放題に
分裂して始末がつかない。淺はかな
功名心を叩き伏せて本心に道を聞く
のが、自分にとつては全く容易でな
かつた。畫は進まない。殊に肝腎の
山に對しては手も足も出ない。感心
してゐた先人の仕事も色褪せた。但
し之には生意氣を割引しなければな
らないが。一番感心したのは古代の

宗教藝術だつた。之には全く頭が下
つた。之でなければ、繪なんぞ描く
のは無用の事だとさへ思つた。果て
は羨ましくなつた。自分が情なくな
つたのである。

そこで様々な恩人が救ひの手を差
し伸べて呉れた。卑怯な自分は眼を
つぶつてゐたのだ。道は足元に在つ
たのである。何を描かうとも、それ
は神の姿であるべきだ。況や山をや。
山に對すること猶古代の宗教者の如
く、山を描くこと恰もその宗教畫家
の如くならば、何ぞ徒らに古人を羨
まんや。さう氣が付くと、實踐の困
難は忘れて、大道へ出たやうな思ひ
がした。が之は迷ひの雲が晴れたに
過ぎなかつた。艱難はその登攀に在
るのだ。

自分にとつては既に山は絶對者で
ある。好きだとか愛するとかいふの
はなまぬるい。且つ不遜だ。崇め、
尊み、拜するのである。その美を讃
へ、その神を傳へ、その徳を宣べん
とするのが自分の仕事の目途であ
る。それが自分の解する山岳畫の理
想である。又わが報恩の一端でもあ
る。ゆめにも現在それが出来てゐる
などと思ふものではない。一步でも
その頂に近づかんと、氣息奄々とし
て攀ちてゐるのだ。思へば日暮れて
道遠き憾みが深い。現在の友よ、未
來の伴よ。

元來山の美とは何ぞ。畏くも大い

なる生命が、地の天と接はる處に現
はす、世にも神々しい、力強い、ま
た悠久の相であらう。「大いなる」
とは、先づ「生物學的生命以上」の
意)之に參するおのれの心は、だか
ら、いよいよ淨化され、強調され、
高揚されなければ、その實相を寫し

目 次

- ・ 吾が山岳畫道……中村清太郎……一
- ・ あざらし……石原 巖……二
- ・ 日本雪氷協會……黒田 正夫……三
- ・ スキー行二つ……田邊 主計……四
- ・ 山で拾つた話……藤島 敏男……五
- ・ 雪の大河原峠……藤川 高……五
- ・ 石徹白の山……谷 博……六
- ・ 樺太の自然と人……初見 一雄……八
- ・ 宛名のない手紙……一 會員……八
- ・ 故澤田君を憶ふ……廣瀬 壽雄……一〇
- ◆ 會員通信……田口、佐藤、廣瀬……一〇
- ◆ 會務報告……二

顯はすことが出来ないのだ。だがも
う文字は澤山だ。考へて見れば空恐
ろしい。併し最早絶望はしましい。唯
精進の足りないのを恐れる。願はく
ば一步一步踏みしめて、雲間に垣間
見る頂さして登らう。倒れるまで。

(昭和十三年師走)

あざらし

石原 巖

銀座七丁目あたりの毛皮店であつたが、大きな硝子窓の中に總海豹皮製の婦人用外套が飾つてあつた。赤味の少ない灰黒の地色に黒い斑模様が見えて、案外にも氣品のある姿だつた。暫らく経つて通つてみたら、もう取り去られてあつたが、どんな人が買つて行つたのだらうと幾らか氣がかりである。いつかまた銀座通りでそれを着た令嬢に會つたにしても、その肫けた姿は凡そあの馴れた海棲動物の恰好とは縁遠いものに違ひない。あざらしの奴隷分出生をしたものだ、僕たちは身内の立身を喜ぶやうな氣持である。

「動物圖鑑」のやうなものを開くと、フィリアザラシ *Phoca hispida largha* アザラシ科、體は略々紡錘形にして長さ約二米、背面は蒼黒灰色にして卵形の白輪黒斑を有し光澤あり、四肢は短かく灰褐色を呈す。北海沿岸に定住巧みに游泳し、時に岩礁に上りて日光に浴するも陸上の運動は拙劣なり。性柔順にして人に馴れ易く、毛皮は數物又は袋物等に供し、又近來はスキーの制動用にも用ひらるゝと懇切な説明のあるのがそれらしい。僕はまだ残念乍ら彼等の棲む北の海を見たことはないのだが、上野の動物園へ行つてオットセイやアシカの同類と汚ない水に浸つてゐるのを暫らく眺めてゐたことがある。そしてそのやうな愛すべき風貌と、スキーの後迂りと言ふ

悲しい宿命を防ぐ仕事とは、極めて似合はしいことだと考へた。あざらしの皮が僕たちの親しいものとなつてから、随分長い月日が経つてゐるのだらうが、その原始的な著想と言ふものは堪らなく嬉しいのである。この毛皮が他の用途に利用されてゐるのを見ると全く場違ひの感じを受けるし、應援間の椅子に載つてゐるのに出會ふと、先づ觸つてみて毛並や色合をしらべるのが、何時とはなく僕たちの習慣となつてしまつた。

モヘアで織つた代用品が濠洲とかから遙々やつて來たのを見たが、そんなものは海豹の捕れない國の人達の苦しまぎれの考案であらう。餘りに人工的で、同じことなら僕たちはこの斑模様のある毛皮の方がいいのである。禁獵になる前までは、原産地へ行くところの皮は殆ど無代同様のものだつたさうで、加工して東京へ來ても、一枚十圓とはしなかつた。今でも何とか抜けみちはあるらしくて、三十圓と言ふ値に上りはしたが、そんなに不足はしない。何かと發明が得意で、自家の床下から出る天然ガスを乾燥場や臺所に利用してゐる鹿澤紅葉館主は、嘗て蛇の皮を代用することを熱心に試みたと言つてゐたが、非常に卓抜な思ひ付きであつたに拘らず、不幸にも死んだ皮は生きてゐる時のやうには働かなかつた。濠洲あたりには却つてそんな蛇があるかも知れない。あざらしと言ふものは、畢竟スキーのために生れた動物だと斷定するのは我々にとつて極めて當然である。

僕はどう言ふものかワックスの使用を餘り好まない。驚くべきその效用が發表されてか

らもう十年以上になるが、これで何處でも登れるやうになるにはその倍もの年月がかゝりさうである。宿屋の土間が蒲燒のやうな音と濠々たるパラフィンの煙に満たされることはなくなつて、僕たちは永持ちのするゾームの赤札が何かを使ふやうになつたが、さて出掛けるとなるとあざらしを忘れないのである。杖を小脇に兩手をポケットに、ラッセルの次ぐらゐを悠々と登つて行く氣持は、どうもワックス論者の神經質よりも氣に合つてゐるやうだ。此間の全日本スキー大會で、滑降や廻轉競技に出る選手たちが殆どパラフィンを専用してゐたことなどを聞くと心が明るくなる。シユタイクワックスがその宣傳めいた效能書通りに行くのはよほどの熟練が要るやうだし、山の刻々に變化する條件に適合する種類を見つけて行くのは殆ど不可能に近い。長い経験と熟練から、條件に適合する種類を選び出したにしても、それには矢張り偶然と言ふものが伴つてゐるやうで、それ位ならもつと根本的な雪質の科學的研究が望ましいと思ふ。どこそこの山をワックスで登り了せたなどと言ふのを聞くと、その苦心の程が思ひやられ、それはまたそれだけのことに過ぎないだけに、何となく味氣ない氣がする。

貼付けあざらしの發明は併しながらワックスの廣らした最大の功績であらう。乾いて紐のやうによれ／＼になつたのを美観でどうにか取り付けて使つてゐた多くの無頓着者には、この手足のない新趣向が全く珍らしくもあつたし、あざらしに對する思想の革命的な變化でもあつた。確實に貼り付いて綺麗に剥

げる。たゞそれだけのことがワックスを使つてのことだけになか／＼思ふやうには行かない。その取扱ひが甚だ微妙で、良く附いたのは取つた後が甚だ不成績であるし、降りを楽ししまうと思へば登りは丁度薄氷を踏む思ひである。僕たちは途中で剥けた者に對する苛酷な罰則を設けて、研究を奨励したが、各々が持ち寄る秘傳はまち／＼で信が置けない。例へば長さの餘つた皮をスキーの尾端表面へ折り返した方がいゝかどうかと言ふやうなことにも決して意見が纏らなかつた。併し経験が増すに従つて、その餘分は惜しまず裁つて仕舞ふこと、スキーの方の下塗りが大切なこと、ワックスは薄くても常に新鮮であること、貼る前に皮は暖めてもスキーは寧ろ冷たくして置くこと、要するに甚だ面倒なことが解つた。それでもこの面倒さは不可能なことではなくて、何時も失敗するのは無頓着者の側である。あざらしの裏に古いワックスのクラストが出来てゐるやうなのは、何時かは寒い吹雪の中ではた／＼足踏みでもしながら、剥けた個所の取り繕ひに苦心しなければならぬまい。そんなのを見ると同情よりも小氣味よさが感じられるのである。

素晴らしく調子のいい時の貼付けあざらしは、僕たちにとつて全くの天國である。足は何の抵抗もなく輕く進み、あざらしは本來の效目を充分に發揮して生き物のやうに働く。登りついて剥ぐ際にも、紙をめくるやうにしないで板を割るやうに一氣にとると、後には充分な下塗りがピカ／＼光つてゐる。會心と言ふのはこんなことかしらと思

はれる。あざらしも全く生れ變つたやうに面
目を実施するのであるが、併し樺太のストウが古
くからこの皮を裏張りに使つてゐたことや、
何時か見たフィンランド製のスキーの裏にこ
の皮が固定的に張つてあつたことを考へる
と、この貼り付けの名案の必然性も思はれる
のである。此頃は驚いたことにこの貼付け法
に暗示を得て電線被覆用の巻テープを代用す

日本雪氷協會の創立

創立世話人の一員として

雪は日本に於いて、相當重要な
問題を投げかける。こんな文明國
に於いて、こんな深雪に廣い面積
を埋められる國は世界中にない。
その被害の大きいことも比較にな
らないであらう。しかし、この雪
がほんとに研究の對照となつたこ
とは最近のことである。

鐵道はその中で最も古く手をつ
けた方であり、つゞいて農村關係
が之に關心を示し出した。勿論氣
象の方でも、降雪については古く
から手をつけ、積雪に於いては比
重をはかつたり、熱傳導度を計算
したりしてゐた。スキーの方面か
ら、雪質の素人議論は色々といは
れては來たが、それは抽象論で
數字にあらはれたものは早大の針
木小屋の雪温測定など、優秀の方
である。續いて冬山の雪崩の問題
がやかましくいはれ、日本山岳會

でも調査表をばらまいて返事をと
つておきながら、その發表は全く
ない位で、雪崩の素人研究も結局
抽象論に終つた有様である。尤も
松方君にいはせれば、雪崩はカン
でゆかなくちや何にもならず、之
を測定や計算してゐたものでは仕方
がないさうだが、それでは具體的
研究は進むことが出来ない。

こんなことで我が國では、研究
されなくてはならない雪が、いつ
までも放り出されてあつた。とこ
ろが昭和九年、十一年の深雪及び
つづいて起つた冷害が松岡代議士
等によつて叫ばれてから、東北局
も出来るし、東北振興會社も設け
られるやうになり、農林省經濟更
生部には積雪地方農村經濟調査所
が山形縣新庄町に新設された。そ
この初代所長山口弘道氏は雪害の
甚だしいのに感激せられて、經濟
調査から、雪害防除に、惹いては
その基礎學である積雪學の研究に
まで入られた。

そこは相談役として擧げられた
のが、林學試驗場の平田徳太郎博
士と早大建築學科の今和次郎教授
と小生であつた。平田先生は永く
朝鮮で氣象を擔當せられた方、今
先生は農村家屋の泰斗である。平
田先生は、小生がすつと前に雪崩
の研究のために手をつけた積雪の
力學試驗を認められ、小生を引張
り込まれた。之に東大農學部の淺
見教授、理學部植物の中野教授、
北大の中谷教授、文理大の今村助
教授等を相談相手として積雪研究
會を組織して調査所の研究を委託
された。この積雪研究會が、外と
の連絡に色々の相談手を求めて
雪の會を組織した。日本山岳會か
らは角田吉夫、加納一郎、今西錦
司、高橋健治などの諸君に入つて
戴いた。さうかうする中に五年程
たち、段々膨脹して鐵道、海軍と
も連絡が出来、遂には中央氣象臺
の岡田臺長にも賛同を得たので茲
に日本全體の研究會を創立すべき
運動が起つた。その間、軍部や興
亞院の宮本武之輔博士から、雪に

りして長く使つてゐたが、新式の貼付けあざ
らしが代つてからは、非常な逆境に陥ちてし
まつた。併し一番氣の毒だつたのは最初の貼
付けあざらしで、使ひ方がよく解らないから
散々ワックスをこねかへしたり、温めたり伸
ばしたりするうちにすつかり傷んでしまつ
た。僕たちの失敗を一番澤山知つてゐるのは
このあざらしである。終り頃には僕はもうす
限らず氷や寒冷にまで範圍を擴
げ、大陸の問題も取扱はねばとい
ふので、名も日本雪氷協會として
三月十六日に發會式を行ふ運びと
なつた次第である。

雪や氷の問題は非常に範圍が廣
いので、その研究者相互には殆ど
無關係のやうなものに出會ふ。そ
れで互の知識を話し合ふだけでも
非常な進歩が見られると思ふ。ま
た各方面の人の研究をまとめて、
一つの問題を解決してゆくことは
甚だ大切なことで、どれだけ研究
の能率が擧るかわからない。更に
その結果を發表して、新しい正確
な知識を普及することになれば裨
益される人々はどうなにか多いか。
自分もその餘恵を享けることを樂
しみにしてゐる。雪崩の正確な知
識、スキーの生命である雪質の變
化にだつて、どれ程の利益が得ら
れるかわからない。どうか日本山
岳會員諸氏も入會して、雪氷の研
究に協されたい。

(黒田正夫)

つかり諦めて、たゞ途中で剝けないことだけ
を希ひ、ワックスを無暗につけ畫鋏で止めた
りして、降りる時には決まつてバラを取り出
すことにしてゐた。四本目のはどうにか長く
保つて、仕舞ひには靴の下に當る部分の毛が
すつかり耗り切れて弱つてしまつた。繼ぎ目
のあるものだつたが、それが幾邊か切れて後、
ある時蔵王の登りで何時の間にかその後半が
とれて失くなつてゐた。もう效目が薄くなつ
てよく後戻りをしたし、とれた時も直接には
何の感じもなかつた。

今使つてゐるのは二年程前に求めたもの
で、拂底の頃だつたから毛並もそんなによく
はない、軟らかで少し頼りないやうな氣がす
る。併し友達の奨めによつてグイスコール油
を豫め充分に浸み込ませて置いたことは成功
であつた。何時も柔軟で寒くても凍らず、暖
かいときも水を吸つて伸びたりしない。ワッ
クスも極めて少量でことたりる。それに今度
は出来るだけ手入をしてゐる。舊いワックス
を溶解で洗つて、このグイスコール操作を加
へた再製品は同じやうに有効ださうである。
僕は何時もこの新しいあざらしとの登りが
楽しくて、偶々途中で剝がれた友があること、
傍らに立つてその至らないところを丁寧指
摘し説明する。併し友は却つてその僕に向つ
てありたいの腹を立て、ぼんやりしてゐる横
から突倒して矢庭に足下からあざらしを剝ぎ
取つてしまふ手段を考へ出した。僕たちはそ
れをあざらしのクレーダーと稱した。

スキー行二つ



田邊主計

正月休日には小谷温泉へ行つた。此頃休日の續く時なんかには乗物も宿屋も無暗に混雑して、ふいに行つたのでは泊れない程だといふので、暮からその宿屋に部屋を頼んで置いた。一行五人、皆未だ餘りスキーには慣れて居ない人ばかりだから小谷あたりがちょうど良いと思つた。それに私も年のせいか温泉のある所を望むやうになつた。近頃旅行なんかしてゐても温泉のある所にはちよつと降りて入つて行きたいと思ふことがある。以前には全く無かつたことである。元旦晝前中土驛着。所が先に送つたスキーが着いてゐない。正確に言へば汽車に乗る三十八時間

前に發送を頼んだものが着いてゐない。これには少し困つたが、中土驛のせいではないから、こゝで小言を言ふわけにも行かない。夕方の汽車で着いたら、ついでの人に持つて來て貰ふやうに頼んで置いて、皆はスキー、私は歩いて行く。皆な氣の毒がるから「なに小生は皆のやうにさう慌てゝスキーをはきたがらない。ノコノコ歩いてるだけでも結構面白い」などと言ふ。事實、スキーにとらはれて山へ登れない場合もある。スキーに慣れてゐない人でも、輪かんじきとシュタイクアイゼンだけで高い所へ登り得る。先年、雪の山を見たいといふはじめての人をつれて

行つた時もさうだつた。そして、雪の中に天幕を張つて泊つたりいろいろ雪の山でのエンタテイメントが出来た。降りだつて、少し位スキーの出来る人よりも安全に早く降りた。又五月の山へアイゼンだけでもつて行つたこともある。だから、スキーが出来ないから雪の山へは登れないと決めてしまふのは早計である。

翌日は一日降雪。次の日の歸路をどれにしようかと宿屋の人に相談する。中土へ又歸るのはつまらぬ。私は湯峠から糸魚川街道の根知驛へ出たいと思つてゐたが、この連中では今は無理ではないかとためらつてゐた、さう言つたのだが、宿屋の人は容易だといふ。殊に出来る人夫をつけますからといふので、晴れたら行かうといふことに相談が決つた。

湯峠（鎌池を通つて湯峠より右手を越す）まで登り四軒、あと十六軒は降りといふのである。われ／＼にとつては「登りは易くして降りには易からず」アザラシをはづすや否や忽ち転倒、それで一度轉んだら雪が深くて中から出て來るのに難い。始末である。だん／＼に時間がのびて大久保の村へ出た時は、懐中電燈の光を頼つてゐる有様で、結局根知まで十二時間かかつてしまつた。宿屋の案内記には小谷温泉—湯峠（四軒、一時間）、湯峠—山口（十二軒、三時間五〇分）、山口—根知驛（四軒三〇分）とある、合せて二〇軒四時間二〇分である。此の時間も少し窮屈だ

と思ふけれども、随分時間がかつたものだと思ふ笑し合つたが、一日で何となくスキーにも慣れて來たやうだし、結局面白かつたと皆喜んでゐた。春にでも、もつと慣れた連中と遠慮なく飛ばしたら愉快だらうと思ふ。

紀元節休日は前日一日を休んで三日にして、白馬樺池へ行つた。會員の目黒氏と菊池氏とそれから友人二人。早稻田の小舎へ行く藤島氏とも一しよになつた。小屋へ着いたのは六時前、小屋もすいてゐて夜は一部屋に陣取つて愉快に話す。その翌日は乗鞍まで行つて歸る。白馬の方へ行くつもりで用意して來てゐたが尾根で風に吹かれるのもどうかと思つて止めた。そこから蓮華温泉の方を眺めてゐるうちに、明日は歸りを糸魚川の方へ出ようかと言ひ出した。友人二人はまだスキーは數回の経験しかないが、我々より遙かに若いから差支へあるまい。それにガイドもつれてゐるから荷も軽く出来るといふのでさう決めた。

十二日、二日間の晴天の後、少し天氣は變つて來さうだつたが、晝まで待てば木地屋へ出てしまふからといふので出かけた（七時四五分）。天狗原でアザラシをとつて、滑降に移る。いゝ心地だ。皆この路は初めてなので喜ぶ。それはいゝが相當こるど。そして木地屋へ着いたのは二時になつた。天氣は快晴となつてまると春だ。それに一番後からノコノコ／＼行くのだからのんき過ぎてじれつた。今は平岩へ出ては先が困るので小瀧驛から汽車で糸魚川へ出ることにする。大所の對岸を山之坊へ向ふ大峠で日がくれて電燈をつけて滑つて行く。それからが案外遠い。小瀧驛へ着いたのは七時半になつてしまつた。この前の四月末には木地屋の入口でスキーを脱がなければならなかつたが、今は小瀧驛までスキーで行けた。糸魚川で晩めしを食べ十時の急行で歸る。この歸路も面白かつた。平岩から中土へは今年は汽車も通じるといふから樺池へ行つても此方へ歸る人が多くなるだらう。この日も十二時間近くかかつてしまつたのだが慣れない者も元氣だつた。その一人は歸ると早速大層よろこんだ手紙をくれた。一日で随分スキーに慣れたやうな氣がすると書いてあつた。事實この程度の「遠足」ならば少しスキーをやつた人たちをつれ出すといふと思ふ、慣れた者はお供になつて氣の毒であるけれども。

私なんかは關とか五色だとかの所謂練習場にばかり數年ゐる「損」をしたやうな氣がする。もつとも、その頃は今程便利に山へ行くことは出来なかつたし、又連れて行つてくれる「先輩」もゐなかつた。今の人は早く山に慣れることが出来るからいゝ。

山で拾った話

藤 島 敏 男

山で拾ったなどいふと、なにが傳説口碑のやうなものでも採集してきたやうにきこえるが、話はそんな味ひのあるものではない。たゞ時と場所とを明らかに誌しておかう。去る二月中旬、白馬岳麓の神ノ田圃小屋に二泊して、スキーを楽しんだとさ、ストーブを囲んで、小屋番や、雪卸しに上つて来た人達から聞いた話である。

ひとつの話はかういふのである。

今年の一月中旬、神ノ田圃小屋に滞在してゐた學生達もみんな引上げ、近くにある成城高校の太極寮も、梅池ヒュツテも無人となつて、神ノ田圃小屋の番人が最後に里へ下つたのである。その途中で二人の登山者に出會つた。二人は小屋番から三つのヒュツテが何れも無人であること、泊るならば梅池ヒュツテにすべきことをきくや、小屋番を百方懇請して遂に神ノ田圃小屋に泊り込んだ。小屋番が二人の登山者と共に小屋へ引返したのは勿論である。

その翌朝、吹雪を銜いて二人は白馬登頂を試みるとして小屋を出ていつたのであるが、さて待てど暮せど戻つて来ない。外は雪が霽々と降る。夜の幕の下りるのも間もない。小屋番は二人の登山者の身の上に何か異

變が起つたものと判斷して、搜索救助はひとりきりでは到底不可能と、意を決して麓の村へ應援を求めに夕闇の中を下つたのである。

そのあとへ一足進みに、首尾よく白馬登頂を終へた二人の登山者が、小屋へ戻つたといふのならば、話は至つて簡単だが、さう都合にことは運ばなかつた。

麓の村では、夕餉のあとの闇煙裏ばたで四方山話に耽つてゐるところへ、山からの急報だ。三四人のガイドは身仕度を整へて、小屋番と共に夜を徹して小屋へと登つて行つた。小屋に着いたのは午前四時、二人の登山者の立戻つた形跡は更らにない。冬の夜の白々と明けるのを待つた、ガイド達は登山者の運命を氣遣ひながら搜索に出掛けたのであるが、まづ念のために成城高校の小屋に立寄つたが、戸は堅く閉されたまゝで、人の這入つたあとはない。大樹の下にでもと、あちらこちらを探しつゝ梅池ヒュツテへと向つたが、行手に望まれるヒュツテから煙の立昇つてゐる氣配もない。さてはいよいよ尾根の上で遭難かと考へながら、戸を排してヒュツテの中に入つてみた。ところが火の氣のない小屋の中で、蒲團にくるまつてゐる二人の登山者が見出された。

二人は前日午前八時に神ノ田圃小屋を出發、登行約一時間にして、吹雪のため前進を思止まり、引返して十時頃には梅池ヒュツテに到着。それから終日火も焚かず、自分達の出發した小屋は遠くもないのだが歸らうとせず、まして、小屋番が自分達の身の上を案じて搜索隊を繰出すなどゝは夢にも思はず、泰然(?)と蒲團にくるまつてゐたといふのである。

いまひとつの話はかうである。二月の五六日頃といへば私達が神ノ田圃小屋へいつた直前である。或る日小屋の雪卸しをやつてゐると、通りかゝつた三人の登山者がある。はち切れさうに膨らんだルックサックには何が入つてゐるのか物々しいで立ち、聲をかけた小屋番に、雪中幕營の用意をして白馬登山にやつて来たとのみを告げて、なほ登りを續けて行つた。

それから三日間が過ぎた。小屋番が成城高校のヒュツテへ借りたスコップを返へすべく登つていつたところ、小屋の入口で、雪中幕營の方針を變更したらしい三人の登山者が壊はした硝子、ビツケルで掘り開けた戸の跡始末をしてゐたのである。門戸を開放せざれば暴力を以つても之を押し開らくといふやうな登山者だから、小屋の内部の整理についても遺憾な點が多々あつたことは言ふまでもない。

三日間の小屋生活で英氣を養つた三人は、汗水垂らして背負上げた雪中幕營の用意を實際に役立たせるべく意氣軒昂と山に向つた。恰も私達が白馬山頂を志して小蓮華の手前から烈風に追返された頃は、またどこかの小屋の戸でも掘り開けた三人

雪の大河原峠越え

藤 川 高

今年の紀元節と日曜の連休を利用してスキーで大河原峠と蓼科山へ行つて参りました。第一日は蓼科山へ登り、二日目に大河原峠を越して三反田へ出ました。蓼科山は御承知のコースと思はれますので峠越えについて簡単に御報告申上げたいと存じます。親湯からスキーをぬいだ十二新田まで約七里の山越えコースに私達三人は十二時間近くもかかりましたが、これは少くとも二時間は節約出来そうですし、大體私達は出發が遅過ぎた様です。山を越してからの交通が少し不便ですが、雪の多い時期に一度行かれるのも面白いと思ひます。

その日私達が宿を出たのは午前九時でした。空はと見ると南アルプスの方は大體青空で、上空から山側にかけては曇つてゐました。前日にくらべて気温も高く何處か春の様な朝です。明け方に少し降つたらしく昨

が山の上を逍遙してゐたことだらうと想像される。

鉄後の體位向上だの、國民精神總動員だのとお題目大流行だが、山の世界ではそれよりも登山道徳向上の方が先決問題である。

日雪の消えてゐた道にも薄く積つてゐます。瀧温泉への分岐點でシャツ一枚になり、スキーを着けました。霧ヶ峯への別れ道まではスキーヤーの姿も見えましたが、それを過ぎると私達だけになりました。道沿ひの約一六〇〇米邊に林野局の伐木事務所が在ります。此處迄は緩い登りですが、此處から地圖の大河原迄は急な登りが續きます。事務所の人と朝の挨拶を交し乍ら、縁に腰を下して雲の動きを眺めると、行くに従つて晴れてくる様です。それでも昨日は良く見えた赤岳や阿彌陀岳のビナクルは見えません。十時半に出かけました。すぐ樹林に入り、急斜面に一直線に架設された木材運搬用インクラインの終點の所から右へデクザクに登つて行くのです。白樺の斜面へ出てふり返ると北岳もやつと姿を現はし、仙丈や木曾駒の方も晴れ渡つて來ました。登るに従ひ樹々は細い枝も葉

も眞白に霧氷が凍りついて全く花が咲いた様です。やつと傾斜もなくなつて平らになり樹林の中を滑つて行き廣い大河原の原へ出ますと峠の方も青空が覗いて見えます。原の一個にガラス戸の入つた新しい小屋が在りましたので軽い食事を攝りました。風は相當ありますが、雲は次第に切れて雪の上には陽光が反射し初めました。此處から原のクラストを避け、林の中の踏跡を行く事にしま

「山日記」掲載眞實集

昭和十四年度山日記は既に編輯に着手して居ります。本年も眞實數を挿入する豫定ですから、是非優秀なものをお送り下さい。なほ簡単な説明と、返送希望の向きはその旨を眞裏面へでも御書き添へ願ひます。採用の分には薄謝を呈します。

した、素晴らしい粉雪です。浅い谷が大河原峠へ向つて百二十度で折れる所に在る小屋のそばでは人夫達が盛に木を倒してゐました。今日は蓼科山も美しい頂を見せません。行く手には峠の鞍部がたのしみで見えます。兩側の山々は黒々とした針葉樹に覆はれてゐるのに、この廣い谷筋は丁度それを貫く大河の様に河もなく一面の雪原です。少しクラストした斜面をゆつくり登つて行くと、蓼科山へ

行つたのか二人のスキーヤーが下つて來ました。

昨日にも増して風の強い大河原峠でした。午後二時です。背後の横岳も、遠い淺間連山も雲で頂上は見えません。少し右へ寄りますと遙かに後立山の白い山々が見えました。パリンパリンの雪の上を右へ上り岩蔭でシルを取りました。いよいよ新コースです。夏は笹原であらうと思はれる△二二三・八米峯の地斜面は豫想の通り素晴らしい滑降斜面を展開させてゐました。適當な間隔で針葉樹の太木が在るので雪も良く、ボーゲンを書き乍ら間もなく△一八七二・五米突起の手前迄來てしまひました。

豫定では此處から尾根について左衛門窪へ出るのがですが、一寸下つてみると傾斜は急だし、物凄くブツシュなですぐ引返し所謂大河原峠道を下る事にしました。植林の中を左へ枯枝を引かけ乍ら抜けると夏道らしい切開きに出ました。それについて少し降ると△一八七二・五米突起の北側急斜面の上です。下の鞍部迄廣いスロープを一気に降りました、お茶と菓子で空腹を満たし乍ら遙かに千曲の谷の方を見やると、荒船山らしいのが平らな頂を見せ、そのすつと右寄りに御座山がボツンと聳えてゐます。そして低い所には家並の集團が點々と存在してゐます。夏道は此處で一六二〇米線の在る突起の右側に入る事になつてゐます

が右側の林は下生えも相當出て入りにくいので突起の西側をまくだらし切開きについて行く事にしました。冷ど平ですが雪が適度にしまつてゐるので氣持の良い滑走が出來ました。間もなく左手から道らしいのが現はれて一緒に走り行くと右手の小さい所に休み小屋が在りました。一六二〇米突起の西北部です。其處からすぐ又尾根に出ました。

一五五四米獨標の尾根の西側へ入つた浅い谷間が足もとに展開してゐます。つまりこの谷へ滑り込むわけです。すぐ右の植林の中へ入りました。體に引かゝる小枯はボキボキと音を立て、折れます。木と木の間隔が無いので滑るのは頗る窮屈でした。數多いキツクタンの後、もう谷底と思はれる頃右から夏道が現はれました。もう占めたものです。最後のお茶と羊羹で息を入れて居ますと夕陽に赤く色づいた雲の子が西へ向つて靜かに動いて行きます。もう夕暮れです。林は死んだ様に靜まり返つてゐます。

谷間の雪は誰に荒された事もない粉雪でした。三人で交代に先頭を勤め乍ら最後の滑走を楽しんで行きました。間もなく薄闇の中に三棟ばかり無人小屋が現はれ右手から巾廣い道が來てゐます。車も入れさうです。一三四五米標點の西北の谷間です。此處から雪の上に踏跡が在りました。もう煙草の火が赤く見える位です。とうとう友は眞暗な林の入口で

ランプを出して腹に附けました。唯ランプの照す雪面だけを見乍ら快く滑つて行きます。

仰ぐとオリオンが中天に輝いてゐます。すつかり夜になつてしまひました。所々雪が切れてゐるので少し歩いては又スキーを着ける事數度繰返し乍ら下つて行くうちに、闇の中に赤い電燈の洩れる家が一軒、次いで二軒と現れやつと最初の部落へ出ました。丁度小諸圖幅の大河原峠道が十二新田の西方で一丁蓼科山圖幅に顔を出した地點です。丁度出て來た村人に聞くと觀音平だとの事でした。午後八時少し前です。舊道ならば十二新田までスキーで滑れるとの事で左に折れる巾廣い新道を突切り家並の間を抜けて舊道へ入りまし

石徹白の山

石徹白とは白山山系の南端、北濃鐵道の終點から一里半餘りの檜峠を西にこえた雪深くうづもれた山村であります。北濃驛で三四尺の積雪がこゝでは一階の軒まで、北の國としては多雪地とはいひかねませうが、ふるいR・C・C報告によつてこの美しい純日本の名を教へられて以來、この村落のもつ明るい高原風な落着きは冬春の白山を巡る山旅のうちに、とりわけ私に明快な印象によつてのみ満たされたものでした。既

た。此處も亦良い雪が堆積して、誰も歩いて居ません。二十分程滑つて行くと左下に十二新田の部落が現はれました。細い流れを渡ると新道です。ガリガリの雪の上を村の中程まで滑つてスキーをぬぎました。滑走はこれで終ります。

三反田發の終車は十時過ぎですから歩いてゆつくり間に合ふと思ふとホツとしました。道はよく乾いてゐました。上小田切の部落の火の見の下で一息入れてゐるとハイヤーが上つて來ました。案の定下りは空車なので早速交渉三反田まで走らせる事にしました。

白田のガランとした町を抜けて千曲川を渡り三反田の驛へ着いたのは午後九時十分でした。

谷 博

に幾組の人がこの地を訪れ、その多くが白山方面へ縦走を試みてゐる筈ですが、最近の模様では、殊に一般スキー界からは全然和らされてゐないやうです。併し白山の Least Hills のうちにスキー・ウオングーリングの對照として私の知る限り下小屋を中心とした大門、猿ヶ馬場の一群と小原の周圍の經、赤鬼、大長の山山があげられますが、これ等の山村の暗く狭隘な谷間での餘りにも貧しい生活に較べて、遙かに豊かな



シヤラマヒ スーユニ

ベルリン二日發同盟によるとエルンスト・シェンファーを隊長とするナチス親衛隊の西藏遠征隊はシッキムを経由し、西藏政府の特別の許可を得てトランス・ヒマラヤを踰へ主都ラサに到着、同地に於て非常な歓迎をうけてゐるとの事である。同隊の目的は舊都ヤルン・ボーランの探検にあるらしいが悉しい事は今の所一切不明である。

次にミュンヘンよりの三日發同盟によるとシュマーデラー、グロープ、バイダルの三名がカンチ攻撃の目的を以て三月五日ウエルデンフェルス號にてハンブルグを出發するといふ事である。

それ許りではない來春はパウアーを隊長として再びナンガへの攻撃も行はれるらしい。獨逸といふ國は全く何と云つていゝか吾々山岳愛好者にとつては洵に羨しい國である。

ヒマラヤン・クラブからの報告によると時

期は瞭りしないが、今年の内にはニュージラードからもカンチを目指す隊が出るらしい。尤も之は偵察を主としてゐるのである。

米國が昨年K2への遠征隊を送つて可なり成功を収めた事は當會報誌上へも望月君が出してゐるが、今年も隊員名は瞭らでないが行く事に決定してゐる。已に入國許可證も得て居り時期も四月の半ばから八月の半ばまでといふ事になつてゐる。アブルッチ稜に可なり見透しをつけてゐる彼等の事であるから今年も或は此の山稜を登るかも知れない。シュマーデラーの一行は僅か三人となつてゐるが何處を登るのだろうか。東北稜か北稜か、シプトンやティルマンの向ふを張つて小遠征隊主義を採り入れた彼等が如何なる策戦に出やうとするのか、洵に興味ある問題と云はなければならぬ。

(吉澤一郎)

スキー根據地としての諸條件を具備してゐます。村を中心として今回登つた毘沙門岳、大日岳のほか、更に西、北の千六百米突級の山山へ、且つはそれ等の種々の思ひのまゝなるコースによるスキー・ウォンダリングには旬日の日數も尙長くないでせう。

毘沙門岳頂。附近はブナの喬木林、山腹は宏大な萱場の斜面、地圖に水流記號のある以外の谷はすべて雪に埋もれてゐました。降路は頂の前山から西北への尾根を下在所に出ました。行く前に少し氣にしておいた河渉りも地圖の一軒家の所で果然橋あり矣でした。

大日岳。車中からも檜峠からも實に悠大な裾をひく一見女性的な山容をもつこの山は、その稜線に張りだされた巨大な雪庇と、スイゴ(一五五八米突)に立つた時、思はず「Tiefe Herren, der Gipfel ist noch fern」とベンネン張りに嘆ぜざるを得なかつた程遙に高く遠く聳える頂は全く豪宕な感銘を受けました。

登路は私達はスイゴから出る谷を登り、通稱千本杉といふ杉林の上の臺地からセビオ(一九四・五)の上へ出ました。スイゴの上からは全部雪庇の上を辿りました。降路としては小洞背の後に出る尾根を降りま

したが、この尾根は村を瞰下す約九百米突附近が百米突餘りどか落ちしてゐて岩壁も表れてゐる程で——西側の谷へ滑りこみました——これより更に西側の歩岐島へ直接降る尾根の方が更に優れた滑降が楽しめます。尾根の傾斜度は、特に九八二米突以下では恐らくスキー滑走のゆるされる限度のものであらうと思はれます。

以下私の経験による當地方の積雪量を記します。
三十七年二月十一日(乏雪の年) 歩岐島十種 檜峠一米 石徹白半米 同年四月十日 歩岐島なし 檜峠

なし 石徹白なし(この際小原なし 小原峠二米 市ノ瀬半米 上小池一米 スキーは上在所の神社まで行く 檜峠附近は笹の山肌を表はす)

三十九年二月十一日(積雪量普通) 歩岐島一米 檜峠數米 石徹白二米

尙これは餘談であります、大日岳への途中最近學んだ針狀結晶雪をみました。積雪層としては實にうつつ、と積つてゐましたが——これが逆光にまるで絨氈のやうに輝いてゐる状態は實に見事なものでした——セビオの頭から頂までの可成り宏範圍に亘つて北側斜面にみられました。

この雪が降つたと思はれる當日の前夜は村ではそんなに寒くない夜でした。結晶は殆んど凡て二重乃至三重の平行結晶であり、特にそれ等が霧氷の場合のやうに規則正しい方面に樹枝に附着してゐるのを二三興味深く觀ました。

二月十一日午前一時京都發——九時北濃驛——檜峠——毘沙門岳——午後四時下在所——石徹白谷屋泊
十二日午前七時半發——セビオ——大日岳——小洞——午後七時半北濃驛——歸京 (三九・二・一五)

エヴェレスト一九三三年の攻撃 (吉澤一郎) は本號休載

新著紹介

Eric Shipton Blank on the Map 三百頁、寫眞及地圖 Hodder and Stoughton, London 1938

「地圖の空白部」と云へば人は直ちに兩極地方を想起する事であらう。然し乍ら亞細亞の分水山脈の一つたる大ヒマラヤ山脈、或はカラコラム山脈の地方には尙多くの未測地帯が残されてゐる。殊に又探險はせられても測量の完成されてゐないものは枚舉に遑がないと云つても過言ではあるまい。

本書は即ち此等の未測地帯の一つであるヤルカンド河の上流シヤクスガム河流域の測量を主目的として行つた一九三六年度の遠征に就て書かれてあるもので、最初の方にはシプトンの登山そのものに對する個人的な見解なども述べてあつて仲々面白い。ヒマラヤに於ては山登りなど考へるのはまだ早い。それよりもブラントンの所をドン／＼探險して行くのが急務である。とまあ一概に肯定する事は出来ない意見ではあるが、こんな見方も或る人達にとつては薬にもならう。

外界との交渉の全然ない地域(和歌山縣位的面積)を四ヶ月にも亘つて、歐人四人とシエルバ七人及バルティ四人と共に調査測量をして行つたシプトンの苦心と努力は吾々の想像も及ばないものであつたらう。兎に角、近頃での讀應へのある本であると思ふ。

(吉澤一郎)

樺太の自然と人

樺太旅行の覺書きより (一)

初見 一

石炭液化と云ふ事が喧しくなつた昨今、樺太は又注目され出した様である。バルブと製紙との問題は其の以前に樺太を最も重要視させた事の一つだけれど、もつと遡つて樺太材としての大量の材木が大震災後の東京にアメリカ材と一諸になつて氾濫した事もあつた。

樺太から森林を除けば残る處は石炭と鱈だと云つても決して過言ではない様だ。農業が驚くほど振はないから「耕して山頂に至る」などと云ふ風景は先づ以て望めない。平原であるべき所が既に森林である、私の歩いた限られた範圍から斯う言ふのは少し獨斷すぎるかも知れないが、東海岸の眞纒と西海岸の久春内を結ぶ北緯四十八度以北の風景は殆どが森林に限られる。其れ以南でも東海岸は落合から白鳥湖を過ぎるともう沿線の兩側は森林地帯になる。之に反して泊居、野田、眞岡と西海岸を南に下つて來ると禿山が目立つて來る。マツチの軸木になつて仕舞つたかどうかは判らないが、新聞のザラ紙に變つた事は確かであらう。

かと云つて耕された畑が皆無といふ譯ではない。南半分の事は皆目知らないから何も云へないけれど豊原の郊外から小沼、落合近邊へかけての鐵路の兩側はやゝ耕地をなして居る。惠須取の街は北緯四十九度以北に位置して居るが其の近在の茶々平原は惠須取川の流

雄

域をなしてゐる樺太廳で云ふ所謂適農選定地なのである。寒帯農業獎勵と云ふお役所の掛聲で一人當り何町歩かの殆ど無償にも等しい土地給與と多分二百圓だつたかの住宅建築費とが支給され數多いことは決して云へない農民が移住して居る。その移住も一律に適農選定地にばかり限られて居る譯ではなくこんな處にと驚く様な場所になつた一大家族で入り込んで畑を作つてゐるものもある。

留久玉川は國境近くの所謂東北山脈に源を發し、茫漠たる東北部の濕原地帯を貫流する可成り大きな流れであるが其の上流とも云ふべき個所にかう云つた一農家があつた。車の通ふ路もなく、舟楫の便とてない所で作物をどう處分するのだらうと問へば、更に上流に在る二、三の造材飯場が唯一の捌け口だとの答だつた。軒端には大根が山の様に積まれたまゝで數日前の秋の新雪が薄く其上を蔽つてゐた。

日本の農夫は其の住む場所に必ず田を造り米を生み出さうとする。米が主食である限り又飯米を買入れてゐたのでは經濟が立ちゆかない限り之は致し方ない事なのであらう。樺太では私の見た北部の範圍では未だ水田は無かつた。今云つた大根とか燕麥其他蔬菜類が主で工藝的な作物としては甜菜が當時の獎勵品だつた。

ともあれ之だけの收穫物では樺太の百姓も樂ではあるまい。米が駄目だとすると結局は米を喰はなくても濟む方法を編出す外はない。お役人と云ふのはその駄目なものを無暗

に奨めたがるもので亜寒帯農業の終點も之の水田耕作なのである。寒地に於ける米作は北海道でも餘り好い成績を擧げてゐない。石狩平野で出来る事は確だが之等道産米は不味く内産米の比ではない。やがては島産米も出来る時代が來て住民を閉口させる事であらう。

若しもさう云ふ時節の到來が有り得るとすれば、そしていつ迄も祖先傳來の米食を續けてゐるものとすれば、樺太の百姓の生活も少しは豊かなものに成るかも知れない。

大きくて太い針葉樹の丸太を組上げた外觀を持つ彼等の住家は世にも豪勢な山小屋みたいで自分は羨望に堪へなかつたけれど、其の窓邊に滲出る貧苦の汚點は見るものの心を重くする。短い夏と一瞬の間にも比すべき春秋、次が長い冬と云ふ一ケ年の繰返しだから土を對手にしてそこから富を創出すと云ふ事も時間と共に寡い。

にも拘らず辛棒強くザリ／＼と地に根を張つて行く、或は行ける彼等のたづきの大半は冬、近在の造材飯場に雇はれると云ふ、いは季節労働によつてなのである。

皆が皆、造材の山子になる譯のものではないが、冬の稼ぎが無い限り、八年に一度の豐作を當てにして年々の喰込みに苦しい凌ぎをつけてゐる北海道の百姓以上には成りゆかぬであらう。

樺太の山脈は地圖を見れば判る様に、中央に一つ、東北部に一つそして南部の鈴谷山脈の三つで最高の山は中央山脈北部の數岳とされてゐる、その山は標高がマチ／＼で、七

宛名のない手紙

會報の原稿が近頃少いとのことに田舎者の正直で、何か通信でも書かうかと今考へついたところ、と言つて日本山岳會のあるビルディングが、どちらを向いてゐるか、會長さんの顔も拜まねば、理事とか幹事とかいふ人がどんなこわい顔をしてゐるか一向御存知ないのだから通信するにしても、相手のない、宛名のない手紙になつてしまふ。時にはこわい人達がこちらに、勿論お迎へするやうな山と言つてはお存知の通りないのですが、お話を聴きたい人間は澤山居るやうですから、顔見せだけでも一度巡業されては、そしたら宛名も出來、通信もどしどし届きませう。

以前から計畫してゐた冬富士の念願が届いて、こちらを十二月二十九日の夜出發し、三十日は御殿場の壘に寝て、三十一日朝から夜中に近づく月の出た頂まで、氣の遠くなるやうな苦しい目に會つてへばつてゐた。九州には雪があつて太郎坊は夏のやうな天氣といふ珍現象には狐につまゝれたかたち。一合目から雪はあつてもアイゼンでないといけないカチカチの氷の雪を、十時間の後には一萬二千尺のテツペンに立たうと。それも丘のやうな山ばかりしか歩いたことのない、山には田舎者の、九州の猿のくせして、富士にどやされるのも當り前かも知れない。それだけのお怒りで済めばよいが、醫學研究室に無理を言つて、もぐり込み、もうこれで立派なものだと思つたのは東の間、氣の狂ふやうな頭痛と胸苦しさに一晩中、とろとろ五人の男が猫になつてのたう

十萬分の一樺太全島圖では四五三六尺、五萬分の一空中寫眞測量要圖では千三百米と書かれてある、いづれも氣休めの程度を出でない單なる記載に過ぎないので正確な測定の結果ではない。

樺太の測量は最近にやつと完了した模様で、北緯四十九度以南の部分は昭和八年に一、二、三等の全三角測量を終り、以北の分も一、二等は同時に完成し三等の分だけが残されてゐた。三角點の高度の決定は三等三角點測量後に、つまり一、二、三の全三角測量終了後になされるさうであるから、此の數香岳の千三百は當にはならない。

ついでに地圖の事を書く、極く大ざつばなものゝ方では、樺太全島圖と云ふ色刷りの上に産物の名稱迄書込んである博覽會の會場案内紛ひのものがある、之は各支廳の管轄區域と町村名と鐵道沿線の地名だけが正確で後はでたらめに近い。五萬分の一陸地測量部發行の方は北緯四十九度以南の分だけが大部分整版され發賣されてゐる。以北の部分は整版されても不發行、不發賣ださうで今後共之の國境地帶の正確な地圖は我々の手に入り相もない。

空中寫眞測量の方は五萬分の一と二萬五十分の一が發賣されてゐたが今は禁止だ相で入手は困難になつた。私が旅行した當時は未だ發賣中で四十九度以北の分は之れに頼つた。而し五萬分の方は極少部分の地域しかなく他は悉く二萬五千分、之も單に五萬分を擴大したものに過ぎず、枚數計り餘計で地圖だけでも一荷物になる程であつた。

未だ手に入らない方では營林署の林相圖がある、之は知合ひをたどるか又は紹介を以て見せて貰ふより外に術がない。數香營林署からは管轄内の林内歩道全部を網羅した路と里程を知るのに便利な地圖が發行されて居るが今も手に入るかどうかは判らない。地形は殆ど當にはならないけれどタライカ湖奥の所謂ソンドラ地帶を行くのに一寸有益である。

高度の未發表と云ふ事からして數香岳が最高かどうかは依然として疑問である。私の見聞した處では名好川の源流に在る名好山と云ふのが今の處、最高のものではないかと考へる。之の名好なる山名はどの地圖にも記載がない。たゞ七十萬分の一の分で數香岳の南方に四五六〇と書かれあるのが之に當りはしないかと思ふのである。之の地圖も元より當にはならないが、歩き廻つて居る間の處々からの遠望で、之の名好山方面の山容がより深々感じを與へ、そして雲のかより具合からしてとしたより少しく高いやうに見えたのである。

(此稿終り)

(十頁二段目より)

私には其内容はわからない。手紙を書かぬ男で大學在學中や卒業後の様子など一向わからなかつたが、昭和七年暮に私は君を箱根底倉へ訪ねた。非常に喜んで迎へてくれた。かの阿房宮のやうな建物の一室を植物研究室にして澤山の標本類を積みあげてゐた。翌日蘆ノ湖にうつる富士山の倒影を眺めながら箱根ホテルで

昭和十一年の六月初め札幌を發ち引續き約五ヶ月間、鳥類採集の目的で樺太を旅行した。その當時心覺えに書き記して置いた手帳から記憶を辿つて見聞を少し許し記き綴つて見たい。その手帳は併し殘念乍ら、その年の十月初旬に樺太全島を襲つた暴風雨の爲めちぎれ飛んで終末の方は失はれてゐるから、印象は益々不鮮明である。

旅行した範圍は主として中央部とその以北の國境に近い部分と、そしてタライカ湖以北の濕原地帶であるが、時間と言ふ節にかかつて書くところは非常に斷片的である。また山には登つたけれども、頂は遂に一つも踏まず、それ故書くことは山登りとは餘り關係がない。否全くないと言つてもいい位だ。その意味からこんなものを會報に出すのは實に沙汰の限りと言はねばなるまいと恐縮してゐる。埋草にでも時々使つて貰ふつもりである。

語り合つたのはつひ昨日のやうな氣がする。「また會はう」と云つてわかれたのが最後になつた。箱根へ行けば君に會へるといふ胸中の樂しみは空しくなつたが私の心の中には深く焼き付いて残つてゐる。富士を見る毎に、箱根や蘆ノ湖を思ふ毎に君は私の想念に浮び出ることであらう。私は君の急逝を限りなく悔む。

(三月三日)

ち廻るといふ醜態。火鉢が悪いと氣付いた時は遅かつた。それに高山病もが擔してゐるやうだし、元旦だといふので折角のお雑煮も咽喉を通らず、ほうぼうの體で、風には追ひまくられて降りました。降りてみるとそれでもどこにも故障はなく、元氣はいゝしやつぱり富士に有難たうと御辭儀させられてしまつた。

田舎者の京上りが、痛い目に遇つたことも知らぬ顔で通してゐると、間もなく、富士の身變りにでもなつてくれたんぢやないかと思ふ遭難騒ぎ、取るものを取つて馳けつけたが一向見つからないも道理、ちゃんと家の中に寝て御座るが、息を引取つてゐる。助かつてゐるのに死んだのか、と割切れないロジツクに、ちよつと判らんやうになつたが、食べ物も、着る物もなかつたのかと氣付いた時は殘念で涙が出た。

それにしても此處、氷ノ山は但馬側に世にも怖ろしい名所が出来る。遭難者の十字架が三本列んで立たうといふのである。知らぬ人は村の共同墓地かと思ふだらう。村の人に言ひたい、遭難の名所は村の名譽にはなるまい、安全なコースに變へてはどうか！勝手に來て遭難して置いて、と開き直るなら、お前のところは畏をかけてゐるのぢやないかと言ひたい。

此處で喧嘩されちや迷惑と言はれた相だが、遭難者の共同墓地は日本山岳會あたりでも不許可にしたらひたいと、ついでに八つ當つて置かう。

どうもづけづけ言つたと思はれぬところで失敬しませう。宛名のない手紙は言ひたいことが勝手に言へるからやつぱりいゝです。

(北九州一會員)

故澤田武太郎君を憶ふ

廣瀬 壽雄

澤田君の想出は主として四高旅行部の想出である。大正七年九月、君は曉星中學から四高獨法にはいつて来た。私が部の委員長格で色々計畫すれば君は何時でも参加した。そして後には私と君との共同計畫が同時に四高旅行部の計畫であつた。アルペンシュトゥックや登山靴の珍らしい頃だつたが、君は入學當初そんなものを持つてゐた。それよりも驚いた事には、立山、白馬等で案内人佐伯平藏に教へられて、私は高山植物に興味を持つてゐたが、君はそれについてひろく深い知識を持つてゐた。私は畏敬せざるを得なかつた。君の植物學に對する趣味はすばらしいものであつたが、努力も亦並々でないものがあつた。君の山岳趣味も植物學に淵源してゐるやうに見えた。君は植物を専攻したがつてゐたが父上はこれを許さなかつたらしい。

四高時習寮を出てから二人は下宿を共にして金澤市内を轉々したが、勉強にはいつも餘裕があつて、暇に植物の研究をしてゐたといふよりも植物學の餘暇に正課の勉強をしてゐたといつてもいい位植物學に執着してゐた。そして箱根への手紙に「お父さん、何故私の植物標本や書籍を隠したりするんですか。そんなにま

でしなくともいゝではありませんか」といふ意味の事を書いたりしてゐた。私は宗門の壓迫をみるやうな感じだつた。よく晴れた星の夜、二人は下宿の物干臺に出て山を語りあつた。

四高旅行部の山岳講演會は君には高山植物の研究發表の機會だつた。又山岳展覽會に高山植物に關する出品が澤山あつたのも主に君の努力の賜物であつた。私はたゞ單純な山好きであつたが、君のは山の生物に關する深い造詣からであつた。云はゞ科學的山好きなのである。

君の登山履歷のうちで記録的なのは大正九年春の飛騨山脈越え(山岳第十六年第一號掲載、拙稿)と、大正十年春の立山針木越え(山とスキー第一年第十二號掲載、澤田)とである。夏山から冬山への轉換期の一記録で當時新聞に大きく報ぜられた。前のは私がリーダーで君と、石川、若林の四名だつたが、後の君一人だつた。私は京都帝大にゐて新聞を見るや否や祝電を打つたのを覚えてゐる。

君は東京帝大に進んでからも例の宗門壓迫の爲に、形式的には他の學部に籍を置いても其實際は植物學の研究に没頭してゐるらしかつた。一度京都へ遊びに来た時も植物のことばかり話してゐた。其後十年程會はなかつたが、二三回植物の研究論文を送つてくれた。が餘りに専門的で

(九頁二段目(續))



◆會員通信◆

グリンデルワルドにて

田口 一郎

久しく卸無沙汰しました。十二月二十日にロンドンから當地に来て、まだ歸れずにまどろしてゐます。毎日面白く滑つてゐます。先日伊集院虎一夫妻が来て愉快でした。伊集院兄もいよいよ歸朝で名残り惜しさうです。僕等もいづれ同じ運命がめぐつて来るかと思ふと……。

昨日フアルホルンへ登りました。千六百米の登りは閉口でした。今日はアイスメーヤから比高二千二百米の大滑降、粉雪の水河、シレッタホルンの眺めなど素晴らしいものでした。もう四十日も、弟二郎と會員の高木君と三人で滑り暮らしてゐるのですが、流石は名だたるグリンデルワルド、少しも倦きが来ません。今冬は一寸心を入れ換へて、ヘルマン・シトイリーからレスンをとつてスキースキートの稽古をやつてもみました。伊集院夫妻がこゝを引上げる日には、エミール・シトイリーを案内に

メンリヘンにゆきましたが、あの大斜面は五寸ほど粉雪が積んでゐて、思ひ残こすこともないやうな快定でした。

明日から、ユングフラウヨツホ、グリンホルンリムツケ、フィニンシテールホルン、ゲムスリムツケ、グリムゼル、といふ旅に出かけます。遙かに諸兄の御健康を祈ります。

(二月三十日)

智異山

佐藤 テル

春立ち初め内地の皆々様はザラメスキーを娯しまれる頃となり、嘸あなたこなたの山々に御活躍のこととお喜び申上げます。私こと相變らず元氣にて、日曜の午後などは近くの山を歩いて僅かに山戀ふ心を見たり居ります。毎々會報その他をお送りいただけまして難有存じます。な

にしる島流しに會つたやうな生活、而も山へ行くと、山に親しむ人の少ない當地ゆえ、いつも懐しく拜見してゐます。先日智異山へ参り(朝鮮では金剛山に次ぐ靈峯)、男と間違はれたり、村の鮮人達に「智異山よりもつといふ金山を知つてゐるが教へて上げ様か」とすつかり鎮山師の取扱を受けたり、案内人におどされたり、南京虫に刺されたり、色々な經驗を致して大變に面白御座いました。雪は所によりましては五尺位もありましたが大體三尺位でございました。

冬富士滞頂

廣瀬 壽

二月末から三月初にかけて、深田久彌氏和久田弘一氏と共に冬富士に滞頂した。本冬は氷が少く、山頂や大火山口に僅に着氷を見る程度であつたが、雪には恵まれ、三月二日新雪が多量に降りつたので、頂上剣ヶ峰絶頂から御殿場口瀧ヶ原附近迄高距三千メートルのスキー大滑降が出来た。山岳スキー滑降高距では最高記録ではないかと思ふ。

二月二十七日 快晴烈風 五合五勾からアイゼンで登頂、山頂は平均風速三八米に達してゐた。剣ヶ峰氣象觀測所着。

二月二十八日 快晴風幾分弱まる案内小見山六合へ一行のスキーを取りに行く。晝頃御針廻り、遠望をたのしむ。深田氏「山岳展望」に熱中する。白山岳東南面氷上滑落停止技術を修練する。午後西安之河原でスキー練習、小火口底迄遊びに行く。夜は觀測所の暖い事務室で和久田氏北大在學中の特殊鋼ビッケルアイゼン創作苦心談を聞かせる。何と云つても山頂では小生一行は勿論觀測所員案内人夫迄全部和久田氏考案門田製アイゼンをはいてゐるので文句なしに頭を下げる。

三月一日 快晴微風 虎岩東方から大火山口に下降。氷相當に硬し。火山口底の氷雪状態調査の上、伊豆岳の水壁を登る。傾斜六十度以上の氷

壁登攀にステツプを切らず、極度にアイゼン技術を用ふ。氷壁上部は萬一を慮つてザイルを用ふ。伊豆岳頂上附近岩陰に一部アイゼンの爪を全く受けつけぬ蒼水があつた。午後和久田氏用事のため下山、全く風がないので劍ヶ峰大澤側の岩壁に遊ぶ。夕刻陸軍醫學校高山醫學研究所を訪問、所員と高山醫學や登山技術の話をして歸る。夜は全く風力計が動かなくなつた。珍らしい、ひと月に一度あるかないかの静かさだ。却つて氣味が悪い。觀測所員から高山氣象の話を開く、四十年前の野中至氏滯頂當時の苦難を偲ぶ。深田氏感激す。寢室は暖房装置なく氣温零下二十度以下し蒲團に息が凍りつく。

三月二日 雪後快晴、早曉二、三時間の降雪で山頂氷上に四、五十センチの新雪がつもつた。絶好の機會と直ちに出發準備、朝食を攝つて腹をつくり夜明けを待つ。七時北劍ヶ峰三角點(三、七六メートル)より少し高い觀測所の屋根から深田氏とアンザイレンしたまゝスキーで下降開始、馬の脊はビツケルで確保して交互に滑降、三島岳でザイルをとき兩杖に替へ、淺間神社銀明水成就岳勢至ヶ窪とスキーを進める。再びアンザイレンして不淨澤を慎重に下る。蒼水の上の新雪頻りに崩落しスキーの角付困難のため時間を喰ふ。約百メートル程下降、安全帯に入りザイルを解き自由スキー、以後廣漠たる不淨澤を思ふ存分滑り下る。小

小集會記事

生は大きく斜滑降で、深田氏は鮮かなシユテムクリスチヤニヤで。案内小見山荷重く(約六貫)滑降に手間取る。三千メートル迄に下ると、晴れ上つて風が出た。山頂は雪烟がもろく、と舞ひ上つてゐる。五合附近から御殿場口登山路の方にまぐ、寶永澤を滑降、更に寶永山東面を下る。二合八勾から太郎坊迄一氣に直滑降、更にザラメ雪を馬返迄飛ばし、五本松(八三一メートル)迄來ると雪がなくなつて終ふ。止むを得ずスキーを脱ぐ。劍ヶ峰絶頂から高距約三千メートル厳密に云ふと二、九四五メートルのスキー連續滑降だ。たゞ時間は途中二時間位休んだり、待合せたり、ワツクスを塗つたりしたとは云へ六時間弱かゝつて終つた。これではむしろアイゼンで下降した方が早かつたかも知れない。

御殿場の驛から雄大な水雪の富士山を見上げると、絶頂からスキーで滑降したなんて、自分でも夢のやうな氣がして一度膝を抓つてみた。

(三月八日)

〇虎ノ門集會室より

集會室の壁間に會員某氏所蔵に係るスイスのスキー地や登山中心地のポスターを掲げました。日本のポスターとはまた異つた趣のものがあります。會員諸兄御暇の折お立寄をお待ちします。

第八十八回小集會は二月十五日午後六時から有樂町電氣俱樂部新講堂に於て開催された。昨年度に行はれた京城大學及び京都大學の蒙疆地方探検旅行のフィルムを借用映寫するために選んだ會場であつたが、静かな落着いた場所、城大隊に参加された東大地理學教室の多田文男助教授の講演も極めて興味深く聞くことの出來たのは幸であつた。

多田氏は約一時間に亘つて「蒙疆の地理」の題下、主として同地方の自然に就て語られたが、先づ中央亞細亞内陸斜面の茫漠たる地形と乾燥した氣候が如何に我々の住む國のそれと異なるかを指摘され、次で同地方の地形發達史を平易に説明された。即ち嘗ての準平原が現在の蒙古高原の高さにまで隆起するに際しては、周邊に至るに従つて高い大規模な盆地狀の地形を既に形成したのであつて、而もその周邊は幾つもの斷層作用其他によつて三つの略々並走する山脈に分れてゐた。最外側の八達嶺、五臺山脈に當る部分は最も高いと同時に海洋からの風雨を直接に受けて逞ましい侵蝕地形を示し、その内側の張家口盆地は既に白河の流域に入つてゐる。第二の山脈は張家口背後に認められる比高五〇〇米前後の急斜面であつて、最も内側のそれは海拔一五〇〇米附近の陰山山脈に相當し、これら三重の障壁に依つて濕氣を妨げられた高原は全くの乾燥氣候下にあり、而もその中央に至る五〇〇軒に於て僅か三〇〇米の落差をもつ程、單調にして涯しない沙漠地方である。換言すれば北支那から内蒙に向ふ途次に於ては、低平なる白河の冲積原と、それに對して聳立つる邊端連山と、更に全く内陸の高原地域とを経験するのであつて、五臺山脈に屬する小五臺山の地形が却つて顯著である所以も諒解出来るのである。

氏は更に同探検隊が目指した唯一の山頂として小五臺山登頂の事情を語られ、前述のやうに最も侵蝕を受けた急峻な風貌を呈してゐるが、その碎屑の堆積した山腹は寧ろ登攀に容易であつて、軍隊の庇護の下に無事頂上を究められたと報告された。

事變以後屢々我々が耳にした小五臺山もかくて同隊の究むるところとなつたのであるが、ミユレンドルフ等に依つて海拔三四〇〇米と稱せられてゐたに拘らず、その時に約二七八〇米と實測されたことは、些かの失望と支那式の大まかさを感ぜしめたことである。

講演終つて同じく城大隊飯山達雄氏撮影の標準フィルム三巻の映寫に移り多くの美しい場面に接したが、次で京大隊淺井辰郎氏が自ら持参された十六耗フィルムに依つて、同隊の動靜を詳さに知り、蒙疆地方の輪廓を窺ひ得たのであつた。探検旅行の機運が漸く旺んたんとするに當つて、この種記録フィルムの我々に齎らすところは極めて大であり、隊員諸氏がその繁忙なる行動に拘らずこのやうな勞作を加へられたことは深い敬意に値する。

會が終つたのは九時半であつた。最後に改めて多忙な時間を割かれた多田、淺井兩氏及び優秀な技術を以つて特に映寫を擔當された會員塚本閣治氏に對し深甚な謝意を表する。當日來會者會員外を併せて七十三名司會藤島理事。

(石原記)

會務報告

二月定例理事會

二月九日(木)午後七時、虎ノ門事務所にて開催。

出席者 高頭、冠、島山、茨木、西堀、額田、黒田、藤島。

一、本年度山日記の件
本年度山日記は一月二十八日の編集打合會にて、吉澤理事が編輯主任となり大體從來の内容、體裁、價格を以て刊行することに決定。

一、山岳第三十四年第一號編輯の件



一、名古屋支部設置案の件
具體案の提出を求め更に討議考慮することに決定。

一、新入會員詮衡の件

山日記編輯打合せ

二月二十一日(火)午後七時事務所にて開催。

出席者 吉澤、木村、高頭、藤島、石原、黒田、西堀

一、本年度山日記編輯の件
吉澤理事の原案其他に就き詳細なる検討をなす。

三月定例理事會

三月九日(木)午後七時、事務所にて開催。

出席者 茨木、鳥山、藤島、黒田、塚本、加藤、西堀、野口、吉澤、石原、中司。

一、山日記編輯の件(吉澤)

用紙品不足騰貴に付き記事削減のこ
と其他を決定。

一、山岳第三十四年第一號編輯の件

(藤島)

原稿は四月末までに取りまとめ得、
發行は六月頃の見込。

主なる原稿

小五臺登攀

木曾駒籠走に關する報告八

ナンダコートの裝備

新高山(本年度)

同 (大正十二年度)

臺灣登山歴史

一、金錢出納に關し會計よりの希

望(鳥山)

一、山岳懇談會の件

西堀、石原兩理事に一任四月中開催のこと。

一、新入會員詮衡の件

寄贈圖書

民族學年報第一卷抜刷

一、雪崩の方言分布について

一、背負梯子について

日本民族學會殿

六甲 竹中靖一著 吉澤一郎氏

アルプス及コーカサス登攀記

石一郎譯 朋文堂殿

同 黒田孝雄氏

早稻田大學山岳部テクニスト 三部

W. A. C. Report

やま 二十五號

日本アルプス 愛場秋文著

三高山岳部々報 五號

地理學評論

山と旅

登高 創刊號

岳聯報告 一號

R. C. C. の報告 二號

山稜 第四輯

山とスキー 十一冊

氣候便覽(大正十三年—昭和五年)

Memories of Travel

Spemanns Alpen-Kalender

The British Ski Year Book

1922, 1925—1928

Rocks and Their Origins

Under The Italian Alps

My Mountains

British Mountaineering

„Neue Möglichkeiten im Skilauf“

Dr. Fritz Reuel

„Ausbildungsvorschrift für die Gebirgstruppen“ Heft 1 Alpine

Technik

„Die Gefahren der Alpen“ E. Zsi

Gmoudy & W. Pauleke

„Der Alpinist“ A. Fendrich

以上四十七冊

森田勝彦氏

受贈會報部雜誌

登山とスキー社

東京野歩路會

熊本アルカウ會

廣島山岳會

關西徒歩會

旅の趣味會

橫濱山岳會

關東旅行クラブ

東京登歩溪流會

山岳巡禮俱樂部

大阪ミテロー會

京都山岳會

がくれい會

東京登歩會

J. T. B

府立高等山岳部

奈良山岳會

阪神山岳會

I M C 山岳會

頂山岳會

獎健歩行會

明峯山岳會

福岡山の會

俣松山岳會

東京アルカウ會

日本アルカウ會

朋文堂

層雪山岳會

橫濱高山岳部 (部報)

ベルグロイト (會報)

東京旅行クラブ (會報)

東鐵やまをこの會 (Vorwaerts)

山村民俗の會 (あしな)

魚市場山岳部 (會報)

名古屋山岳會 (會報)

日本ハイキング俱樂部 (會報)

The Mountaineer 1.

The Prairie Club 1.

Appalachia 1, 2.

De Bergids 1.

Sierra Club Bulletin 1, 2.

Natural History 1.

Le Alpi 12.

Die Alpen Les Alpes-Le Alpi 1.

The Geographical Journal 1.

Education Fisica No. 5.

Horoleec 1.

La Montagne 1.

Revue Alpine 1.

Le Alps 1.

Trail and Timberline 1.

昭和十四年四月十日印刷
昭和十四年四月十一日發行

東京市豊島區池袋四ノ四五八
發行兼編輯者 石原 巖

東京市芝區琴平町一(六二屋ビロ)
發行所 日本山岳會

電話芝(四三)一六四九
振替東京四八二九

東京市芝區濱松町一丁目十三番地
印刷者 植田 庄助

印刷所 成文堂印刷所